

野鳥 会報

No.73 2012年 3月発行

日本野鳥の会新潟県

鳥のいる風景 真冬のアオバト *Sphenurus sieboldii*



24年1月16日、津南町のすぐ隣にある長野県栄村、「さかえ倶楽部スキー場」に出かけたところ、第一リフトの最終付近のアズキナシの木でアオバトが3羽、実を食べていました。

カメラは車の中に置いたままだったので、大急ぎで取りに行き、撮影したのがこの写真です。

オス1羽、メスが2羽の合計3羽がいて、それぞれに実を食べていましたが、メス2羽は雪のある枝に移動して、なんと雪を食べはじめました。

この行動にどういう意味があるのかは判りませんが、水分の補給かもしれません。

アオバトの研究グループに聞いても真冬の雪の中で行動するアオバトは初めてという話ですし、豪雪地にいるということも驚きとのことでした。

野鳥専門雑誌「バーダー」の担当者も、雪の中のアオバトの写真は初めてだそうです。

鳥はいつ、どこにいるのか判らないもので、カメラは常に持っているのが最良かもしれませんね。

十日町市 南雲敏夫

ハヤブサ *Falco peregrinus* の非繁殖期における生態と社会構造

新潟市 石部 久 石部 武尊

I ハヤブサという鳥

ハヤブサ, *Falco peregrinus*, (タカ目ハヤブサ科) は、広大な海や平坦な土地と、海岸や山地の崖、高層建造物などの大規模な崖構造が組み合わされた、開放的環境を生息地として分布、繁殖している。

冬季には、平野の湖沼、農耕地に生活するハヤブサを頻繁にみることが出来る。ハヤブサは、ドバトやタゲリ、ムクドリ、ツグミ、カモ類など捕



図1—冬季、繁殖崖を離れず、共に捕食行動するA番い(2012.1.29)



図2—冬季、繁殖崖を離れず保守維持するB番い(2011.11.22)



図3—冬季、繁殖崖上空を雌雄で飛行するC番い(2011.1.13)

食動物の動向を、高い構造物などに止まり、辺り一帯を見張り、狩りをする機会をうかがっている。ハヤブサの非繁殖期の生活、番いの関係、繁殖するための崖との関係など、冬季個体群の生態と社会構造については知られていない。

筆者等は、1997年からこれまで、海岸や山地の崖に生息するハヤブサについて、生態やハヤブサ社会の構造を調べてきた。ハヤブサの、非繁殖期の社会構造の在り方は、種の存在様式の重要な基盤と考えている。今回は、ひとつの地域にまともって生息するハヤブサ個体群の、冬季の生態と個体間関係など、社会構造について述べる。

II ハヤブサの調査について

岩崖と砂地からなる日本海沿岸の南北15㌔に、任意の調査地を設定し、出現したハヤブサの出現場所、出現時間と行動の軌跡、出現状況、行動の内容、種内関係、種間関係を調べた。定点観察を行い、個体数の把握、各番いの比較には車で移動して調査を行った。特に隣接する2番いのハヤブサ社会の関係や行動圏の調査は、番いが安定して生活する、若鳥が巣立ち、崖からいなくなる9月から3月(2011年9月24日～2012年3月20日)までの間の65日間、343時間を観察に要し、飛行行動などを調べた。

ハヤブサ個体の識別は、個体間関係や社会構造を知る上では重要である。ハヤブサは、顔の頬の様子が『ハヤブサひげ』といわれる特有の黒青色斑紋からなり、個体によってひげ状斑の形状と色調は異なっている。また、雌雄は全長、翼開長が違い、雌は雄の体に比べて、全長は1.24倍も大きく、体形、シルエットは著しく異なる。これらの特徴を用い、いずれの個体であるか、出現した個体の識別を総合的に判断した。

III 結果と考察

1 冬季の分布と生息の概要

海に沿って南北15㌔の海岸には、不規則な間隔をおいて、ハヤブサが3番い生息している。



図4—冬期間、番いは繁殖崖をほとんど離れず警戒している (2012.2.9)

冬季間は、切り立った崖を主要な生息場所にして、日中のほとんどの時間を、定住している繁殖崖か、または付近の崖の高い樹木等に止まり、それぞれの番い雌雄は、同じような生活リズムで生息している。

生息しているハヤブサの3番いを、北に位置するものから南へと順に、A番い、B番い、C番いとする。毎年繁殖するAとBの営巣崖の距離は、300 mほどであり、海にそそり出た扉状の断崖で隔てられ、2番いの巣位置は近接している。BとCの営巣崖地の隔たる距離は、9.5 kmである。大規模な3箇所崖の立地状況は、北西に海が広がり、海に対し崖は南東側に峻立する。各崖には決まった個体、6羽の雌雄が、3番いを形成して生息している。それぞれの崖一帯や付近には、不定期に若い個体や、識別不明の個体が出現する。他個体の出現時には、番い雌雄による排他行動が見られる。また、各番いの崖から離れた場所で、識別不明の単独個体が出現する。その時、最も近い崖に生息する番いの存在を確かめに急行し、番



図5—冬季、繁殖崖に出現した他雄個体の排除を番い雄にうながす雌 (2011.12.26)

い雌雄の確認をしている。岩崖と砂地からなる海岸15 mには、3番いのハヤブサ個体の他、少数のハヤブサが生息している。3番い雌雄以外の他の個体生息は、不定期であり定住性は薄い。

2 冬季の繁殖崖と番いとの関係

個体が特定の断崖を繁殖営巣地としてもつハヤブサ番いA、B、Cは、繁殖を終えた後も営巣崖を離れることはなく、崖で番い関係を維持しながら、冬期間を一緒に生活している。一年を通して見ると、番い関係を解消することなく、繁殖期、非繁殖期を問わず、同一の雌雄によって、協働による捕食行動を行ったり、毎日の生活を繰り返して行ったりして、繁殖崖で生活している。

ハヤブサ個体にとって、例年、繁殖する営巣崖で、冬季の繁殖崖確保を番いで行うことは、番い関係維持と営巣崖確保維持機能が有効にはたらく、確実に繁殖成功率を高めるのであろう。

3 ハヤブサ雌雄の関係

ハヤブサは性的二型が顕著な動物である。幼鳥がいないう冬季は、雌雄2羽が並んで崖に止まったり、同時に飛行したり、獲物の受け渡しをするなどしており、性の判別は容易である。

雌の雄に対する優位性は、行動の様々な番い関係に見ることができる。

非繁殖期は、繁殖崖の様々な箇所で一緒に並んで止まる雌雄を見ることが多い。冬季のハヤブサの狩りも早朝に行われており、午前7時半頃には食事を終えている。

冬期間を通して雌も狩りをするが、雄の狩りはさらに積極的に捕食行動を行い、捕らえた獲物は雌に運んでいる。雄が雌に獲物を運ぶ行動は、年間を通して見られるが、12月頃からはさらに顕著になる。雄が食べ物を運んでくると、雌はそれを奪うように足でつかみ、食事したり、食べ残しは貯食したりする。A、B番いの雌の獲物は大半がハトである。食事の様子は、狩りして運んできた2 mほど離れて止まる雄に、一欠片の肉片も与えず、独り占めして雌だけで食べている。



図6—雄が捕らえた獲物を食べる雌 (2011.11.18)

朝に狩りをして運んできた時の雄は、そ嚢が膨らんではおらず、食べていない様子である。雌の食事をそばで見ながら止まっている雄が、食事を我慢できず、おそろおそろ、餌を食べている雌から奪い取る行動を観察した。食事を15分して、そ嚢が大きく膨らみながら食べ続ける雌から、サッと足を出して餌を掠め取り、急いで逃げる雄の行動を、異なる雄で2度観察している。そ嚢をいっぱい膨らませ、食事を終えた雌は、主要崖の一箇所に止まり、4-5時間は動かないことが多い。その間、雄は狩りする断崖上に止まり哨戒、獲物の動向を見張り、探索、捕食にあたっている。

12月に入ると、暖かな日差しの日中は、雄と雌が繁殖崖を飛行し、いくつかの崖位置に止まる。それぞれの岩窪地面をかきむしったりする行動が見られる。また、雌は交尾行動の仕草をその位置で行い、雄を盛んに誘う。崖の各所に積雪があっても、巣位置の選定、交尾行動など、繁殖期の兆しは好天時に見られるようになる。



図7—冬の断崖上で獲物を挟み撃ちする捕食行動のため止まるA番いセグロカモメが上空を飛行する (2012.1.24)

3月初めには、崖の産卵予定位置がほぼ決まり、雄は雌の近くで、盛んに誇示行動の飛行を行う。それに伴い、3月中旬には一日に数回の交尾行動を行う。交尾行動は繁殖崖のあちこちで行われ、雌が盛んに雄に交尾を促し、高い鳴き声を上げて雄を誘っている。

今回、ハヤブサの非繁殖期の生態を調査中、B番いの雄が事故に遭い1月29日に崖からいなくなった。雄が死亡してからしばらくの間、いつも繁殖崖に止まっていた雌は、崖に止まる時間が極度に少なくなり、いつもの繁殖崖から離れた南方で日中を過ごしていた。1羽だった雌が、繁殖崖で新しい雄と一緒に行動するようになったのは3月1日である。3月3日には盛んに2羽で飛行し、崖樹木で交尾行動も行った。5日には産卵予定地の崖穴に2羽で出入りした。新しく番いは形成されたが、繁殖活動への移行は順調に推移する。

これらの行動は、すべて繁殖する崖面のいずれかの位置で行われ、冬季11月や12月、1月、2月と非繁殖期が経過するにつれて、食べ物確保や行動の主導に、雌の優位は顕著さを増し、明らかに番いの間には雌の優位性がみられる。

4 ハヤブサの社会と個体群関係

海岸に営巣地をもつ、3番いが生息する繁殖崖は、それぞれの間が不規則な距離で隔たっている。繁殖崖景観は、海面から崖が北西を向いてそそり立ち、崖壁面には、営巣するための崖棚、岩窪地が、それぞれの場所に数カ所存在する。

ハヤブサ番いAとBは、崖の産卵位置が近接し、互いの距離は300mほどである。2番いの繁殖



図8—吹雪の崖で、繁殖行動のひとつである向かい合いお辞儀行動をするB番い (2011.12.27)

崖は、海に面して岩盤が峻立し連続しており、海からの北西の風は、常に岩壁にあたるように吹いている。繁殖崖は海面に突起した断崖で隔てられている。

営巣地の繁殖崖が300 mほど離れた2番いの雌雄は、番いの領域を隔てるように、屏風状に突起した断崖を行き来して飛行することはない。A番いは営巣壁面崖から北、東方面を主要な行動圏としており、B番いは南方向を行動圏にして生活している。雌雄4個体の行動の飛行軌跡は、隣接するそれぞれの繁殖崖面の海側領域には進入せず、相手の崖壁前面を飛行することはない。

これまで、ハヤブサのテリトリーについては領域の広さに様々な数値が論議され、行動圏等は定かではない。今回、ひとつの事例ではあるが、近距離で隣接して、毎年、200 mから300 mの巣の位置で隔て、2番いのハヤブサが、これまで3年連続して繁殖している。この近すぎるとも思える距離の隔たりで繁殖行動を可能にしているのは、ハヤブサの食性と捕食行動の特性、繁殖するための崖の存在とが、ハヤブサの生息習性と大きく関係しているであろう。

5 ハヤブサ個体群の生息とこれから

ヨーロッパのエーゲ海断崖には、エレオノラハヤブサ *Falco eleonora* Eleonora's Falcon が繁殖している。エレオノラハヤブサは集団で崖に繁殖し、集団で獲物の狩りをして生息している。ハヤブサ科のチョウゲンボウは、集団繁殖を容易に行う小型ハヤブサとして知られている。新潟県でも新幹線高架橋、学校建物などを繁殖崖に、番いが近接して複数が営巣している。

ハヤブサ *Falco peregrinus* は、大規模な崖壁面を営巣地に繁殖する。ハヤブサが繁殖する大規模な崖に、2つの番いが巣位置を近接して繁殖している。一例ではあるが、現存するハヤブサの繁殖形態の事実として、今後は、同一崖一帯における複数繁殖の可能性を探りながら、生息調査をする必要がある。

ハヤブサが生息し、繁殖するには、鳥類を高速で飛行し捕食行動を行うための広い開放環境と、繁殖に適した形状をもつ産卵するための断崖岩窪地の存在が不可欠である。これらの要件をそろえた環境であれば、ハヤブサの繁殖行動は可能であ



(2011.11.18)



(2012.3.3)

図9-上下2枚の比較は、番い雄が変わったことを示す。雄のハヤブサひげ紋様は異なり、番い相手の雄は変わっている。雌は同一。

る。現在、ハヤブサは絶滅危惧種として生息が危ぶまれる鳥類である。ハヤブサの生息環境は、人社会の人為的な作用による不安定な状況にあり、保護のための方策を探る生態調査は急務である。

文献

- 1) Cramp,S.(ed.) 1980 Handbook of the Birds of Europe the Middle East and North Africa, The Birds of the Western Palearctic Vol. II , Oxford University Press pp.327-334
- 2) Tom J Cade(ed.) 1982 The Falcons of the World Cornell University Press pp.132-135
- 3) 日高敏隆(監修) 1996 日本動物大百科 3 鳥類 I 170-175 頁 平凡社

フォトアルバム

表紙

「真冬のアオバト」の続き



アズキナシの実を食べるアオバト



雪を食べるアオバト

「超ドッキリ!!」

私の知り合いの女性の出来事ですが、昨年(2015年)の8月24日、中津川の左岸の林道を走行中に突然窓から入ってきて頭の上に止まったそうです。たしか、頭を離れた直後の写真です。

その後、車内をバタバタ、ゴツツンを繰り返して大変でした。車の3ドアをすべて開放し、ようやく飛び立ってくれたそうです。もう一度体験したいそうですが、無理でしょうと言う話しでした。

写真の様子からしますとオオコノハズクの幼鳥かと思われます。原版は相当暗いためパソコンで明るく処理してあります。

十日町市 南雲 敏夫



「あ然!!」



宝徳稲荷奥社

キセキレイの写真を撮ろうと、あっちこっち流れ流れてとうとう長岡市塚山の宝徳稲荷まで足を延してしまった。「いい写真が撮れますように」2礼2拍パチ、パチ。奥社の裏の林で他の鳥の写真を撮って車に戻ると、あ然!!

車の中に本日の本命キセキレイが居るではないか!さすが神様。でもこれでは近すぎて涙が出ちゃう。

柏崎市 小林成光

藤巻山のブナ林を訪ねて

上越市 勝俣 将明

藤巻山のブナ林は、妙高市関山にある国立妙高青少年の家から約4kmの地点に位置する。自然の家の駐車場に車を停めて案内看板に従って50分ほど歩くと藤巻山登山道に着く。登山道までは、コナラ・カラマツ・スギ林をぬって登るゆるやかな散策路になっている。5月の末、雪がとけると林床にはニリンソウ・サンカヨウ・エンレイソウが花をつける。林をぬけると林道に出る。しばらく歩くと視界が開け、遠く日本海を望むことができる。

林道のあちこちにはブナ林からしみ出た水によってつくられた小川や水たまりが点在する。水たまりをのぞけば、モリアオガエル・サンショウウオなど生き物を見ることができる。

林道では、木々を飛びまわるサンショウクイ・シジュウカラが姿を見せ、木の頂きではノジコやホオジロがさえずる。初夏にはブナ林の上空を飛翔するクマタカを見、眼下に広がる森からはカッコウツドリ・ホトトギスの声が聞こえてくる。

日本海を見ながらしばらく歩くと山側に藤巻山登山道入口の看板と脇には整備された登山道が現れる。そこから急な登り坂を5分ほど登ると目の前には樹齢150年の勇壮なブナ林が広がる。

ブナ林に入るとあとは尾根筋を歩くゆるやかなルートがしばらく続く。尾根筋はブナ・ミズナラの混交林になっている。ブナの枝先にはヤドリギが見られ、冬期にキレンジャクが飛来した痕跡を見ることができる。



ブナ林に入ると野鳥の姿は容易には観察することができなくなる。しかし、ブナ林のよいところは、沢の音以外はほとんど聞こえないところにある。耳をすませば、野鳥の音が普段以上に鮮明に聞こえてくる。目を閉じれば木々をわたる風の音さえ新鮮に聞こえる。普段は視覚を集中させ野鳥を見ることが多いが、たまにはゆっくり聴覚を集中し、野鳥の声を聞くのも良いものである。森の中からはカラ類の音が沢からはアカショウビンの歌声が響いてくる。

6月中旬には梅雨の季節となる。薄暗くなった林床には白く浮き上がるようにギンリョウソウが姿を現す。種子植物でありながら葉緑体がなく、自分で栄養分を作れないが、ブナの腐葉土から栄養を吸収して生きている植物である。

しかし、なんといってもこの季節の醍醐味は雨が降った時に観察できる樹幹流である。樹幹流とは雨水がブナの幹をつたわって流れるもので、ブナの葉が雨を受け止め、幹をつたわらせて自分の根のもとに雨水を集める現象である。

幹をつたわる雨水は予想以上に多く、手を幹につけるとその激しさに服がずぶ濡れになるほどである。ブナの木の下にいればほとんど雨が落ちてこない。雨が降っているのを忘れるほど快適に歩けるのもブナ林の特徴である。



夏になるとミズナラの幹にミヤマクワガタなどの甲虫類が姿を現す。さらに、ブナの幹を注意深く観察すると尾根筋の何本かの木に彫刻刀で傷をつけたような跡を見つけることができる。これは、この森を生息場所としているツキノワグマの爪痕である。自然の家が開所して20年以上経つが藤巻山でツキノワグマに出会った人は未だにいない。この時期は大型の哺乳類、ニホンカモシカも姿を見せる。

夏のブナ林は、谷から吹き上がる風の音を除けば本当に静かである。シートを地面にひいて森を見上げながら一休みするのもちょうど良い季節である。

秋、ブナ林はすっかりその姿を変える。ヤマウルシやハウチワカエデは赤く紅葉し、ブナの森にコントラストをつけ加えてくれる。

秋は、アケビやヤマボウシが実をつけ、その実を求めて小動物が集まってくる。林床には誰かが落としたぬいぐるみと見間違ふほどかわいらしい



ヤマネを見ることもできる。ブナの実やミズナラの実は、長い冬を乗り越えるツキノワグマや森に棲むネズミなどの大切なえさとなる。

冬、ブナの森は深さ3m程の雪に覆われる。2月の下旬、雪もしまつて堅くなった時期を選んでブナの森を訪れることもできる。自然の家にはスノーシューという西洋式かんじきがあり利用することが可能である。地上3mの空中散歩は、違つ



た視線でブナ林を満喫することができる。

森が長い年月をへて、移り変わり、最も安定した姿となるのがブナ林である。ブナの葉は、地面に落ちると長い時間をかけて腐葉土に変わる。ブナ林は、「自然のダム」と言われているが、じゅうたんのようになかふかした腐葉土は、たくさんの水を吸収し、たくさんの水を貯え、洪水から人々を守ってくれている。ブナの根は地面に広く広がっているため土砂崩れも防いでくれる。

1時間ほど尾根を歩くと藤巻山山頂に到着する。そこから30分ほど下ると林道に出る。林道からはゆるやかな散策路を歩くこと30分で自然の家に着く。

新潟県野鳥観察図鑑

アオバズク (*Ninox scutulata*)

英名 *Brown Hawk Owl*



1. アオバズク成鳥



2. アオバズクの生息環境



3. 営巣樹洞から出るアオバズク (メス)

1. 新潟県のアオバズク

夏鳥として佐渡島を含む県内の低山帯から平野部の社寺林など、大木のある林に渡来し、樹洞で営巣するが近年減少している。渡りの時期には粟島にも飛来する。新潟県準絶滅危惧種。

2. アオバズクの特徴

全長約30cm、翼開長70cmほどのやや小型のフクロウ。羽角は無い。虹彩は黄色。身体の腹側には太い縦縞があり、他のフクロウ類と容易に区別できる。翼が長く、小型のタカのように見える。

野外での雌雄の識別はできない。夜行性で、日没直後薄暗くなりはじめると活動を開始する。渡来してきたときは高い枝やアンテナなどに止まって「ホッホー、ホッホー。」と良く鳴く。

3. 生息時期

県内には4月下旬に渡来し、9月下旬から10月上旬には南方に渡去する。

4. 生息場所

平野部から山間地の林に広く渡来するが、大木の樹洞で営巣するために社寺林や屋敷林など繁殖できる場所は限られている。オシドリやムササビなど樹洞をめぐる競合する動物も多い。



4. 日没後、セミを捕らえたアオバズク



5. カブトムシを捕らえて運ぶ



6. 巣立ったヒナ



7. 巣外給餌を受けるヒナとクワガタムシを与える親鳥



8. アオバズクの食痕

5. 繁殖

県内ではケヤキの大木での営巣例が多いが樹種は問わない。5月下旬から6月上旬にかけて産卵し、主にメスが抱卵する。7月中旬には樹洞の中から「チリ、チリ。」とヒナの小さな鳴き声が聞こえるようになる。

7月下旬、ヒナが樹洞から巣立ちする。しばらくの間樹洞近くの横枝で巣外給餌が見られるが、ヒナの成鳥に伴い行動範囲を広げていく。

6. 餌

アブラゼミ、ヒグラシなどのセミ類、カブトムシ、ノコギリクワガタ、ミヤマカミキリなどの甲虫類、オオミズアオなど、多様な飛翔性の昆虫を捕食している。またコウモリ類の捕食も多く観察されている。いずれも飛びながら捕獲し、営巣樹洞近くの枝に止まり、捕獲した動物の羽や頭をくちばしで切り落としてからヒナに運ぶ。夕方7時から8時頃までの昆虫類が飛翔する時間帯に最も頻繁に捕獲を行う。

7. 観察方法

渡来当初は日没後によく鳴くので、鳴き声をたよりに口径の大きい双眼鏡で観察すると見つけることができる。

日没以降に飛翔性の昆虫を狙って飛ぶため、林の近くで、多くの昆虫が飛翔している外灯を注意して観察していると出会うことがある。

外灯近くの止まり場所の下には捕獲した昆虫類の羽や頭が散乱していることが多く、アオバズク発見のポイントとなる。

8. 参考文献

- ・新潟県の野鳥 新潟県鳥類目録 日本野鳥の会新潟県支部
- ・日本野鳥の会新潟県支部報 63号・64号
「市街地の鎮守の森で繁殖するアオバズク」
後澤正知
- ・フィールドガイド日本の野鳥 日本野鳥の会

(写真・解説 岡田成弘)

新潟県探鳥地ガイド 雪国の鳥をたずねて

鳥屋野潟 試される都市と自然の共生

探鳥地の様子

湖水面積約 170ha の鳥屋野潟は新潟市中央区に位置する県内最大級の潟湖である。新潟駅から 1.5km ほど東に進むと弁天橋に至る。ここは鳥屋野潟の上流部にあたり、橋から潟を望むと水面には弥彦山と角田山が映り、蒲原平野の原風景を今もとどめている。岸边には潟を縁取るようにヨシ原が広がり、街と湖面をやさしく隔てている。開けた湖水面、ヨシ原と河畔林、鳥屋野潟公園の森、潟を取り囲む街と水田。多様な自然環境で形成される鳥屋野潟には四季を通じて多くの野鳥が生息する。

鳥の観察

秋冬期、北方から飛来する 4000 羽のコハクチョウが湖面を埋める。早朝、ねぐらとしている潟の入り江から次々と湖面中央に進み、家族単位で飛び立つ姿は雄大である。日中湖面にとどまるマガモやコガモなどのカモ類は 1 万羽を超え、国内有数の淡水カモの越冬地となっている。

桜が咲き競う春から初夏にかけては公園の森に多くの渡り鳥が立ち寄り、身近にその姿を楽しませてくれる。ヨシ原ではオオヨシキリがにぎやかに囀り、カッコウの声が響き渡る。水生植物のコウホネが繁茂する湖面ではカンムリカイツブリが繁殖し、鳥屋野潟の自然の豊かさを象徴している。

(岡田 成弘)



渡り途中、鳥屋野潟で翼を休めるキビタキ



鳥屋野潟で繁殖するカンムリカイツブリの親子



厳冬の鳥屋野潟で越冬するコハクチョウ大群

発行 2012年3月31日 No.73
発行人 石部 久 編集者 小林成光、浦部良雄、千葉 晃
事務局 日本野鳥の会新潟県
〒950-0941 新潟市中央区女池3丁目13番25号
TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002